

第 6 章 独学を支援する作戦を立てる

森下誠太, 2002 年 3 月 22 日, 「教材設計マニュアル」 輪講

「導入 - 展開 - まとめ」の枠組みとガニエの 9 教授事象の関係

「導入 - 展開 - まとめ」は、授業を考えるときによく使われる枠組みで、教材を作成する際にも利用することができる。

実際に導入で何をすべきか？展開で何をすべきか？ということはガニエの 9 教授事象を元に考えることができる。

導入

導入の役割は、新しい学習の準備を整えることにある。

・教材に注目させ、学習目標を知らせ、必要な既習事項を思い出させる（事象 1~3）。

ゴールを提示することで、学習者に目的意識を持たせ、学習意欲を高める効果も期待できる。

展開

・学習者の記憶に新しいことがらを組み込む作業（事象 4・5）
・組み込まれた記憶を引き出す道筋をつける作業（事象 6・7）

まとめ

・学習の成果を評価し、復習の機会を作る（事象 8・9）。

学んだ内容の応用や、発展的な問題の提示なども考えられる

表 1. ガニエの 9 教授事象

1. 学習者の注意を喚起する
2. 授業の目標を知らせる
3. 前提条件を思い出させる
4. 新しい事項を提示する
5. 学習の指針を与える
6. 練習の機会をつくる
7. フィードバックを与える
8. 学習の成果を評価する
9. 保持と転移を高める

説明をチャンクに分ける

説明することが多くなりすぎると、学習者は内容を把握できないので、チャンクに分割する。

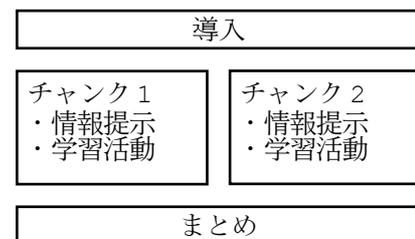
チャンクを利用した教材の構成としては、導入を行ったあと、情報提示（事象 4・5）と学習活動（事象 6・7）をチャンクの数だけ繰り返してまとめに入る。

チャンクの設定に関しては、第 5 章の課題分析図が参考になる。最も小刻みな場合は課題の数だけチャンクを作る。

チャンク - chunk

かたまり。人間が把握する意味のかたまり。本文中では、『教材の中で、新しい内容を説明し、それについての練習をして確認するためのひとかたまり』として用いている。

図 1. チャンクに分けた教材の構成



指導方略表の作成

教材の仕様に近いもの。教材がどのような意図で作成され、どのように利用されるべきなのかが表される。

指導方略 - Instructional Strategy

教授目標を達成するために、どのような働きかけをするかについての構成要素と手順の計画。
例「○○のような学習課題を、○○のような学習者に教えるためには、○○のような教授方略を採用するのがよい。」

■ 学習課題の性質に応じて指導方略を選択する

言語情報

宣言的知識の学習。公式や定義，史実などを覚える場合。ただ覚えさせるのではなく，情報を整理して覚えやすくする工夫が必要。

知的技能

手続き的知識の学習。学んだルール（分類方法や計算方法）を未知の事例に適用する場合。一度利用した例は二度と使わない。学んだルールを未知の事例に適用できるようになって初めて，知的技能が修得されたとみなされる。

運動技能

体（からだ全体、あるいは一部）を動かす，コントロールする課題。タッチタイピングのような課題もここに含まれる。ステップごとの達成を確認し，段階的に課題を達成させる。また，一通りの手順ができるようになったあとも，反復して練習させ，スピードや正確さなどを向上させる。

態度

あらゆるものごとや状況等に対する肯定的あるいは否定的な感情，つまり「選ぶ」ことを支える気持ちを涵養するような場合。環境学習などが含まれる。態度を行動化する技能も学ばせる。

認知的方略

学習スキルの学習，「学び方を学ぶ」場合。

考えられる指導方略

- ・多くの学び方に触れさせ，メタ認知を促進させる。
- ・自分の学び方を振り返らせる。応用の場面を多く用意する。